

第 5 巻刊行にあたって

堤 正典

本書は、2014 年 7 月 12 日に神奈川大学横浜キャンパスで開催された「シンポジウム・ユーラシアを研究する『言語教育におけるレアリア～ロシア語と日本語』(2014 年度神奈川大学国際交流事業、主催：神奈川大学言語研究センター)を基盤としている。このシンポジウムでは、4 名が報告を行い、3 名の討論者がそれらにコメントをした。本書では、報告の 4 件は、問題提起、論文、報告、報告要旨とそれぞれの形式で掲載し、3 名の討論はその時の報告や自らのコメントに鑑みた論文として掲載することができた。

レアリアを研究テーマのひとつとして取り上げようと考えたのは、私と小林潔氏とで進めていた 2008 年度から 2010 年年度の科研プロジェクトの準備のときであった。非専攻課程のロシア語教育において、語彙や文法などの学習に習得基準を策定しようとしていた。その中で、レアリアについても習得基準(あるいは、学習の優先順位)が決められないものか、検討しようということになった。しかし、そのプロジェクト内では、結局、ほとんど手を付けられないままとなってしまった。そこで、改めてシンポジウムとして、さらには日本人へのロシア語教育とともに、ロシア人への日本語教育を絡ませて、この問題を討論してみるということになったのである。シンポジウムのプログラムは次ページに示す(登壇者の所属・職名は開催時のもの)。

シンポジウムを終えてしばらく時間が経過した。そろった論考を読んでもみると、当初考えていた範囲を超えて、様々なレアリアの問題が存在することが分かる。多様な問題が現れてきている。これは、まだ考察が足りずに未整理であるからだけではないように思う。もちろん、整理していかなければならないことも多いのであるが、レアリアはまさに言語と言語外現実との関わりであるため、多様であることも当然のことである。

純粋な言語学として言語を見ると言語外現実との区別は明白であろう。しかし、言語教育は言語そのものというより言語コミュニケーションを重視するわけで、コミュニケーションの面において、あるいは、言語の運用の面においては、言語と言語外現実はより密接に結びついている。そうなると、言語内の問題とレアリアの問題を区別するのが難しいのではないか、そのように思えてくるのである。

さて、本書であるが、残念ながら、執筆のための時間があまりとれなかったこと、さらに編集のための時間も十分ではなかったなどのことから、論考同士に重複も見られ、まとまった一冊としては必ずしも良い出来とは言えないだろう。それも編者の力不足が原因であるが、今後もこの問題の研究と議論を続けていき、近い将来に大きな展開を成し遂げたいと考える。

2014年度神奈川大学国際交流事業
シンポジウム・ユーラシアを研究する

「言語教育におけるレアリア ～ロシア語と日本語」

日時：2014年7月12（土）13:30～17:30（13:00開場）

会場：神奈川大学横浜キャンパス 17号館 215会議室

横浜市神奈川区六角橋 3-27-1

TEL 045-481-5661(代)

東急東横線白楽駅下車徒歩13分

<http://www.kanagawa-u.ac.jp/access/>

13:30 開会

挨拶 石積 勝（神奈川大学学長）

13:40-14:10

堤 正典（神奈川大学）

「外国語教育とレアリア」

14:10-14:40

小林 潔（ロシア国立アストラハン大学）

「日露の異言語教育現場から見るレアリア」

<休憩>

14:50-15:20

アリーナ・サヴィノワ（ロシア国立アストラハン大学）

「文化コンセプトとレアリア — 外国語教育における言語文化の役割 —」

15:20-15:50

アレキサンダー・コスチルキン（ロシア科学アカデミー東洋学研究所）

「日本語基礎動詞の本来的使用 — ロシア出版の教科書の観察から —」

<休憩>

16:10-16:55 コメント

高木 南欧子（神奈川大学）

朝妻 恵里子（慶應義塾大学）

阿出川 修嘉（東京外国語大学）

16:55-17:30 全体討論

17:30 閉会

閉会の辞 堤 正典（神奈川大学 言語研究センター所長）

総合司会 西野 清治（神奈川大学）

主要使用言語：日本語

来聴歓迎・参加無料・事前登録不要

主催 神奈川大学 言語研究センター